

## 第147回簿記検定試験 2級 出題の意図・講評

### [第1問]

#### (出題の意図)

本問では、与えられた取引の説明文をよく読み、冒頭に掲げた勘定科目群を参照して正しく仕訳を示せるかを問うています。なお、商工会議所簿記検定試験「商業簿記標準・許容勘定科目表」に目を通していた受験者であれば、問題文の取引を適切な勘定科目に結びつけるのがさらに容易であったはずですが。

1. 本社の増設工事の完成により、建設仮勘定から適切な勘定科目への振替と、これに伴う旧建物の除却処理が正しく仕訳できるかがポイントです。
2. 外貨建て（ドル建て）の輸出取引について、事前に締結された為替予約により、適切に振当処理を行えるかどうかポイントです。
3. クレジット払いの売上の取消（返品）処理について、信販会社へのクレジット手数料と消費税の税抜き処理とを併せて仕訳できるかがポイントです。
4. ファイナンス・リース取引の借手側の会計処理について、利子込み法により、問題文の通りに第1回目のリース料の支払と残額の債務計上を合わせて、正しくリース資産の計上ができるかがポイントです。
5. 開発中のソフトウェアの完成により、償却対象の勘定科目への振替と契約に含まれる4年分の保守料の計上処理が正しく仕訳できるかがポイントです。

問題文をよく読み、取引の結果として、どのような資産又は負債の勘定科目の金額が変動するかを考え、また、その結果として収益又は費用が生ずるのか（生じない場合もある）を考えて、素直に仕訳を起こせるような基礎的な簿記の学習ができている受験者であれば、比較的容易に正答に到達できる問題でした。なお、最近改定された出題区分表の改定部分に関する出題も多く含まれていますが、公表されている「2級・新規論点に関するサンプル問題」に目を通していた受験者であれば、より正答に到達するのが容易であったはずですが。

#### (講評)

本問では、与えられた取引の説明文をよく読み、冒頭に掲げた勘定科目群を参照して正しく仕訳を示せるかを問うています。取引の結果として、どのような資産又は負債の勘定科目の金額が変動するかを考え、また、その結果として収益又は費用が生ずるのか（生じない場合もある）を考えて、素直に仕訳を起

こせるような基礎的な簿記の学習ができていない受験者を想定したものです。実際に答案をみますと、勘定科目の単純な誤りや数値の桁の誤り（例えば、20,000,000 を、2,000,000 あるいは 200,000）のようなケアレスミスや、問題文の月と年の違いを正確に読み取れていないものも多く見受けられました。

5つの小問のうち正解が1～2問に受験者の相当数が集中しており、小問の1と2は比較的良好にできていたようですが、他の小問は計算力と仕訳力の差がでてしまったようです。次に正答率の低かった小問ごとに、答案の内容をみてみます。

3. 結果としてクレジット売掛金の金額の計算が正確にできていない答案が大多数でした。

4. リース取引の問題ですが、3級でしばしば出題される「商品¥100,000 を仕入れ、¥20,000 を普通預金から支払い、残額を掛けとした。」という仕訳を考えれば容易な仕訳であったと思われそうですが、何か難しく考えた受験者が多いようです。また、問題文の月と年を取り違えて計算した答案や、思い込みで当座預金を機械的に使用している答案もありました。

5. 使用する勘定科目として、建設仮勘定、修繕費、保険料といった誤りが多く見受けられました。商工会議所簿記検定試験「商業簿記標準・許容勘定科目表」に目を通していけば、避けられたミスと思われそうです。

改定された出題区分表の改定部分に関する出題も多く含まれており、改定の内容や公表されている「2級・新規論点に関するサンプル問題」に目を通していた受験者であれば、容易な問題であったはずですが、ほとんど意識してないと思われる答案が多数見られたのは残念です。今後も、出題範囲等の改定事項の内容を事前によくチェックしてから、受験されることを望みます。

## **[第2問]**

### **(出題の意図)**

第2問は、会社の合併（吸収合併）と子会社株式、および連結会計を出題しました。合併と連結とは全く別個の論点として扱われることが多いのですが、ともに他の企業を傘下に収めるという点で、本質的には同じカテゴリーに属する取引になりますので、広い意味での企業結合に関する総合的理解を問いました。

連結会計については、今回が2級では最初の出題でしたので、基本的な事項に留めるとともに、連結修正仕訳のみを問いました。また、配点についても、合併や子会社株式の論点と組み合わせることにより、仮に連結会計に関する学習が進んでいなかったとしても合格に必要な点数を得られるように配慮しました。

た。さらに、合併や子会社株式に関する出題に関しても、過去の出題実績やテキストなどで扱われている練習問題よりも簡易にするとともに、勘定科目等もあらかじめ示して答えやすいようにしました。

もともと、子会社株式は時価評価しないで取得原価をもって貸借対照表価額とすることをはじめ、3級で学んだ勘定記入や決算時における勘定の締め切り方など、基本的な知識をしっかりと身に付けているか否かによって簿記の実力がそのまま点数に反映されるよう心がけて出題しました。

### (講評)

今回、2級で初めて連結会計が出題しましたが、白紙もしくは全く準備が足りない答案が非常に多く目立っていました。その一方で、問2(3)のすべての連結修正仕訳を正答していた答案も多く、連結会計の学習に取り組んできた受験者とそうでない受験者との間で二極化していました。連結会計は、今回は限定的な出題に留まっていますが、次回以降は本格的に出題されていくことになります。理解するまで時間がかかる分野ではありますが、行うべき手順は一定のものでありますので、訓練を積み重ねれば必ずできるようになります。毛嫌いしないで学んでいただきたいと思います。

また、問1の吸収合併は、従来から問1で出題されていた問題と比べて帳簿価額と時価がすべて一致しているため時価に修正する必要がないことに加えて、その他資本剰余金が生じないように配慮したのですが、残念ながら正答率は極めて低い状況でした。連結会計と混同している答案も見受けられました。のれん勘定の記入も、問題で記入すべき勘定科目等をあらかじめ示していたにもかかわらず、3級で学習した内容ができていない答案も少なくありませんでしたが、かつての勘定記入の問題と比較しますと徐々にではありますが改善傾向がみられました。決算時におけるのれんの償却は当期に発生した分に加え、前期から繰り越している部分を含めて求める必要がありますが良くできている印象でした。

さらに、子会社株式の取得や決算時の評価についても、基礎的な理解ができていれば解答そのものは複雑なものではないのですが失点している答案が多く、残念でした。

「当期準利益」などの誤字や、指定されていない勘定科目で答えて点数を失ってしまった答案も多く、もったいないと思いました。つまらない部分で得点を失うことがないように、注意して答案作成に臨んでいただきたいと思います。

### [第3問]

#### (出題の意図)

本問は、問題用紙に示された決算整理前残高試算表、未処理事項および決算整理事項にかかわる資料に基づいて、答案用紙の損益計算書を完成させる問題です。財務諸表作成問題としては、基本的で標準的な問題であるといえます。

解答にあたってのポイントは4つあります。1つ目は、未処理事項にかかわる修正仕訳、決算整理事項にかかわる決算整理仕訳を正しく行うことができるかどうかです。2つ目は、決算整理前残高試算表に修正仕訳と決算整理仕訳の結果を正しく反映させることができるかどうかです。3つ目は、損益計算書に計上される勘定科目（収益および費用の勘定科目）を正しく選び出すことができるかどうかです。4つ目は、収益および費用の勘定科目とその金額を損益計算書に正しく区分表示できるかどうかです。

決算処理および区分損益計算書について基本的な理解ができていれば、十分に正答できる問題であると考えています。

#### (講評)

財務諸表作成問題としては特に難しい内容は含まれていませんでしたので、満点またはそれに近い得点がとれていた答案が一定割合はありました。しかし、他方で、基本的な学習や理解が不足しているため正答できていない答案、あるいは、明らかに準備不足のまま受験したと思われる答案も比較的多くありました。

誤答が比較的多かったのは、火災保険金にかかわる未決算の処理、商品にかかわる棚卸減耗損と商品評価損の処理、満期保有目的債券にかかわる償却原価法（定額法）の処理などです。いずれも2級の商業簿記としては基本的なものですので、正確な学習をしっかりと行ってほしいと思います。

また、本問のような損益計算書を完成させる問題では、精算表を完成させる問題とは異なり、報告式の損益計算書における表示区分の内容や勘定科目と表示科目の違いなどについても基本的な理解が必要となりますので、この点にも注意しながら正確な学習をしっかりと行うことが大切です。

### [第4問]

#### (出題の意図)

本問は、「工場会計の独立」に関する問題です。本社と工場が離れていることなどの理由から、工場での会計を本社から分けて取引の記録をすることがあり、これが「工場会計の独立」です。ここで、本問では、材料費、労務費、製造間

接費などの金額計算とそれに基づく仕訳を行うように求めています。それぞれの問題での金額の計算と、この金額による仕訳が理解できていることで正解となる問題です。

本問のような問題は、過去にも同様の出題があり、決して目新しい問題ではありません。基本的な「工場会計の独立」の問題であり、工場の会計を独立させた場合の費目ごとの金額計算とそれによる勘定科目を通じての仕訳について、基本的な理解が十分かどうかを見るための問題です。

#### (講評)

本問は、「工場会計の独立」に関する基本問題です。本問では、材料費、労務費、製造間接費などの金額計算を行い、それに基づいてそれぞれの仕訳を行うように求めています。全体的にみると、理解している受験者とそうでない方との差が明らかになっているようです。

商業簿記同様、取引に関する記録としての仕訳は、会計において極めて重要であることは明らかです。しかしながら、残念なことに、仕訳についての学習は行き届いていない受験者が多々見受けられます。特に、工業簿記の場合は、一度覚えてしまえば、費目別計算から損益計算書や貸借対照表までの一連の手続きが大変円滑に理解できるようになります。今後の試験等に備えて、是非一層の学習を期待しております。

### [第5問]

#### (出題の意図)

標準原価計算を行って、仕掛品勘定と損益計算書を作成する問題です。標準原価計算は制度として認められた原価計算方式ですので、勘定にどのように組み込まれるのか、財務諸表の作成とどのように結びつくのかを理解しておくことが重要です。今回のような問題は標準原価計算としては基本的な論点といえます。

仕掛品勘定についてはパーシャル・プランによる作成を出題しましたが、シングル・プランも出題範囲ですのであわせて学習していきましょう。損益計算書では、売上原価部分が標準原価計算にもとづく計算になります。また、今回は営業利益までの作成が求められていますので、販売費・一般管理費は原価実績を集計し、損益計算書に計上します(販売費・一般管理費には標準原価計算は適用されません)。

(講評)

仕掛品勘定については、今回はパーシャル・プランでしたので、直接材料費と加工費のところには原価実績をそのまま記入すればよく、計算量は少なくなりましたと思います。仕掛品原価の計算では、加工費に進捗度を加味しなければならないところで計算量が増えますが（パーシャル・プランでもシングル・プランでも同じ）、多くの受験者は正確に計算できているようでした。

損益計算書のほうは、進捗度の計算もありませんので、標準原価を使って少ない手数で計算できるはずです。標準原価差異も仕掛品勘定で算定してありますので、仕掛品勘定が正確に作れていれば、容易に金額を記入できたと思います。やや誤答が多かったのは、標準原価差異の分を売上原価に加算しなければならないところ、減算してしまったケースです。加算になるか減算になるかは、標準原価差異が借方差異になるか貸方差異になるかによって決まります。今回は借方差異でしたので売上原価に加算します。

全体によくできていましたので、平均点は高くなると思います。今回は基本問題ですので、これから受験を予定する方にも繰り返し練習してほしい問題です。